

ロンドン自然史博物館に標本調査で通っていた折、訪問研究者の一人として開館前に職員側の入口より入館させていただきました。日中は人であふれかえっている展示スペースもがらんとしています。そこを抜けて地下の仕事場に向かうのですが、ほとんど人のいない状態の展示を毎朝見るのは密かな楽しみでした。朝の静かな雰囲気の中での展示空間は、また違った表情を見せてくれるからです。

ロンドン自然史博物館は歴史的な建造物ですが、天窓を使った自然光のもとにホール展示が構成されていることが大きな特徴の一つです。ディプロドクス（竜脚類の恐竜）の全身骨格標本が出迎えてくれるエントランスホールも、プレシオサウルスなどの海生爬虫類の巨大標本が壁に並ぶ回廊も、この天窓からの採光のもと、展示されています。このため、朝と昼とで光の当たり方が違うことで、巨大な展示標本の見え方は大きく変化します。

私たち化石研究者は標本を写真撮影する時、ライティング（照明にあて方）にとっても気を使います。標本の真上から光を当てた時と、低角度に横から光を当てた時とでは、まるで雰囲気が違って来るからです。また分類学的に重要な特徴も光の当て方によって、見えたり見えなかったりします。標本の隅々全てに白日の光があたることが必ずしも唯一ベストな見え方ではなく、影が薄くできることで表面の微妙な凹凸が認識できる場合も多いのです。ライティングを工夫することは撮影の醍醐味でもあり、また時に分類学上の新たな発見につながることもあります。私は貝化石の研究者なので、せいぜい手のひらサイズの標



写真1 海生爬虫類化石の展示回廊。天窓からの光の角度で標本の見え方も変わってくる。



写真2 早朝のプレシオサウルス類化石の展示。陰でより立体的に見える。

本に対してライティングを試行錯誤していますが、博物館のホールでは巨大な骨格標本に対してライティングの変化を楽しむことができるのです。

天窓式のホール展示は、建物内での電気照明のみによる展示では創り出せない魅力を持っています。早朝のロンドン自然史博物館の展示ホールはそれを改めて実感させてくれます。考えてみたらヨーロッパの歴史的な博物館はこのような光の取り入れ方をうまく活用する作りになっているように思います。「陰翳礼讃」は日本の建築の専売特許ではなく、標本展示に関してはミュージアムの伝統的な技法だったのかも知れません。

なお、早朝のミュージアムは、スタッフの方たちの準備の様子を見ることができ嬉しいひと時でもありました。清掃の様子ひとつにも、多くの来館者を迎える前のちょっとした緊張感や、博物館に対する思い入れが伝わってきます。滞在中お世話になったキュレーターの方も「私はこの雰囲気が好き」と秘密を打ち明けるように微笑まれているのを思い出します。早朝のミュージアムは、自然史博物館が生きて活動している息吹を感じられる機会でもありました。